

人口問題研究刊
研究資料第2号

昭和二十三年六月 日

産児制限の基礎的理論

(新マルサス主義の概観)

厚生省 人口問題研究所

目次

はしり

一 マルサスの時代の背景

二 マルサス主義

三 新マルサス主義理論の形成

四 若干の新マルサス主義者の所説

五 新マルサス主義運動

新マルサス主義とは一体如何なる主張であらうか。これには凡そ二つの立場があると思ふ。即ち一は新マルサス主義を受胎調節論そのものと解するものがある。この立場からすれば受胎調節をその手段とするところの一切の主張が新マルサス主義であり従つて社会主義の立場に立つ新マルサス主義も有り得ることとなる。又二の立場は新マルサス主義をもその組織的なる社会改良運動の基礎理論と見做すものである。

ともかく新マルサス主義はマルサスの人口原理を前提として賃金貴金説を採用し、労働者階級の社会経済的地位向上を因らるべからざるマルサスの道徳的抑制の代りに適齡結婚と受胎調節を以てすべきことを主張するものに外ならぬ。

勿論受胎調節なる行為その自身は生理的調整の一種であるに過ぎないから、それは種々の論議から主張され得る。現に種々の論

傍から主張されている。そしてこれらに主張の中心を新マルサス主義の名義以て呼ばれる。

この新マルサス主義の歴史性を考へる所は、それと以て單なる「受胎調節論」と見るより正しくある。それは一つの経済学説であり、受胎調節のみが労働賃金と上り労働者階級の境涯を改善しようとするのである。他の方面は、この説に對し無効であるという主張であり、これまた労働運動及社會主義と不可分なものである。階級的な主張である。いわばマルサスの手を離れた後にみけるマルサス説が新マルサス主義である。

新マルサス主義については本文に於て取扱われているが、こゝに於ては、
よく述べざる必要がある。新マルサス主義がマルサス主義を母体として成長したと云ふ事、従つて新マルサス主義の理解のためにはマルサス主義について、
も簡明瞭に觸れて置く方が便宜であり、またマルサス主義の理解のためにはマルサスの生きた時代の特色を知らなければならぬ。こゝに於て

下 趣 旨 から 新 マルサ 主義 の 概 観 に 先 立 ち 極 め て 簡 単 な ら ば マルサ
 主義 的 な 背 景 と マルサ 主義 に つ い て 若 干 の 紙 幅 を 割 く こ と に し た

一 マルサスの時代の背景

マルサスの時代は丁度英國の産業革命の行わかつた頃の時代である。種々の機械の續々と發明され、それらの機械を利用する工場制工業は、より手工業の漸次駆逐される迄の資本家と労働者との対立の愈々顯著ならんとしつつある時代の或る時である。工場制工業は、小手工業者や農村の資本主義化の合理化による工場と逐はれた。思民の群は陸續として賃銀労働者の階級に加わつて来た。

一才當時のヨーロッパは絶えざる戦争の道中であり、その上英國には屢々不作の能取来りて穀物の価格は饑乏に昂騰するに於て賃金は、是等の争奪のため却る終下の傾向にあり、労働者は非常な深境に陥つた。窮乏なる労働者を救ふために救済法が勵行されたが、その効果を挙げ得なかつた。しかも新興資本家の信條は、自由主義の原理は政治の上にも社會経済関係の上にも實現され、需要供給の理論に基いて、目前の労働者の窮状も止むる事なく、とされた。

一方人口は加速的に増加し、貧民は益々増加し、犯罪は益々激しくなり、正に當時の社會は失業、貧窮、疾病、犯罪、饑餓、穀物騒動、如き陰惨な事柄を以て最も鮮かに知られた。他方佛蘭西に爆發した革命の余波は英國社會にも激しく打寄る思想の危機を醸し出された。

この社會的經濟的危機の人々の注意を人口問題へ惹きつけた事は當然である。マルサスの人口論を著すもその時々の非常な社會的不安定を呼んだものは正にこの時代の背景の下に於てのものである。

二 マルサス主義

前述の如く、社會的經濟的背景のありつゝといへば、マルサスとて、
て人口論と、こゝに直接の動機は、コトヴィンヤコントロールの政治
想的無政府主義、共產主義的理想、社會論への反駁に及
た。

急進主義者ゴトヴィンヤの思想は、英國思想界に及ぼせる佛蘭
西革命の影響の一頂点をなすものであるが、彼は一七九三年の政
治的正義と倫理——幸福に及ぼすその影響の研究』を、又一七
九八年には同一思想を譯した。『研究』を『発表』、高時の思想
界に非常な反響を喚起した。即ち彼は現代社會の悪徳と
窮乏の殆ど全部を人間の社會制度に歸責し、人
類墮落の温床は政治的規則と財産の因習的管理方法の裡に在
るといふ。平等社會説を掲げた即ち社會的環境と制度
の改革すべし、一切の犯罪と窮乏は駈逐すべし、人間及社會は

完全なる状態に達する。ゴトウは未だ人口増加の
理想社会実現の障礙となる。考へるに於ては生殖は抑
止し得るもかかると。最早は人口増加を必要とするは
去る時期に到達する。若しは同性間の情欲は減減し生殖は廢た
られ。各人の生命は無期限に延長する。此の如き主張は

ゴトウも亦一七九四年に人類の精神的発達なる一書と著し
その中で彼は理性の発達と科学の進歩による人間物質的幸福
の増加し不老不死となると極めて楽観的の理想社会を描いた。
既に如く當時の社会は極めて暗澹たるものなり。従つて明
を慕ふは其の如きとする心情は極めて強烈なり。この時代の進
歩は科学の勃興期でもあり。その中で科学の発達による少量
の労働で多くの生活資料を生産し、地上の樂園が出現すると宣
相へしたことも其理の如き事なり。

この楽観論は多くの共鳴者を見出し、たゞの如きか、マルサスの父

カニエルも其ノ内の一入ニ入リタル父カニエルノ子カニエルトノ論争

人口論執筆ノ直接動機と爲ラシキ事ト人ノ意識と云フコト有リ

マルサスはゴトウニ現代社會ノ要徳と窮乏とを殆ク全部を

は人間ノ社會制度ノものト歸ヤンとするに反シテ社會制度は

害悪ノ及相的一原因ト認メテ之を人間社會ノ源泉ト亂シ

其ノ流ト混濁ヤリトスル也ノ最も根本的ノ原因即チ人口

原理ト比較シテ見れば水ノ春に浮ぶ珠ノ羽及にも比下ベキナル

に思フコトハトシテ假キ一步ト讓リゴトウニノ理想社會ノ實現ハ

たもトモ假定シテカハル社會ニ於テは窮乏ノ要徳は存在せず

衣食住は清潔ト健康的で各人は主として農業労働に従事

し生産物ノ分配は公平無私ト各人ノ欲望を基準トシテ行

われまた選擇ノ自由ト貞潔ト維持する結婚が行われカハル

理想社會ノ假キ實現トシテ假定シテカハル社會ニ於テは

人口が可及的速ニ増加スルコトヲ避ケル爲メ労働ノ重キ農業ハ

使用される結果農産物の増加もまた速である。しかし人口の

食物の増加も人口の増加に追隨することは出来ぬ。わが国は人口の増加に

理想社會も僅か五十年の歲月を経たに及ぶ。現存の社會は墮落

の困難、人間の性質そのものに膠着的に現れ来るのである。かくなく

理性の支配に利己の精神の人間行為の統制と行儀もまた社會

も自然法の必然の結果として極めて短期間に現在の社會をとり

運むべき社會に轉移するに云々のあり。更にブルジョアは内情の情

慾は將來滅滅するであろう。この社会の轉移は必然の根據

なき臆説と稱し、必ず事情のなるものは其の如く將來に亘る変化を

予いものと主張する。またホトウシニ及ニトリルニ人命無しの懸絶な

説に對しては宇宙の因果法則を以て視る膠説として推しては

マルサスの人口理論を要約すれば次の如く、命題となるであらう

一 食物は人類の生存に絶対不可欠のものである

二 同性間の情欲は將來にも又今日の程度と大差ないであろう

三 女子の妊孕力は一一定である

四 人口増加は食物の増加よりも不足に大である

五 従つて人口は食物の水準に限定さるべきはけはらなかつた

六 この自然法則の下に人類は弱先と悪徳が生じ、社會の

完全性と實現する途上の一大障礙となるものなり、之は到

底打破し得たのみである

以上がマルサス説の主張の要諦である。尤も人口論著二版以後に

於て彼の見解には重大な修正を加えられた。群衆も亦弱先も居

る。道徳的抑利を認めた。これは周知の通りである。かくかくマルサス

人間の意志作用を認めた。これは人間の行為を一定法則の下に概括せん

といふ初めに於ける理論の特色を露ぼした。其事は否否と本手な

更にマルサス人口理論の上に立つて救貧法の可否を論じ、

貧法は如何なる方向に於て貧民の一般的地位を圧迫する傾向を

有つて居るかを、即ち人口を更に増加せしめざるを要するべき否を

増加が見られぬこと著し貧民は救済法の所がけに一官を支持する
見ゆなくとも結婚しうからま法律はむしう貧民製造法と云ふことが
あるも、その救済を受けず人もは従前より少量の食物しか得
られる事になり、益々被救恤者が増加せしむることになる。また救済院
で食物の消費はかかることも、勤勉であり、社会に与る大切である人々
の食物の分前を減少せしむるならしく、独立出来ず人々を増加せしむると
し、これに反対した。

マルサスの経済理論の貢献に關しては、貧富の兩論が行われ、必
ずしも評價は一致しないが、佛蘭西革命時代の横溢せる空想的
理想社會説に対し、人口法則なる現実的批判を放たし、確かな大
きな貢献であることである。また、その進化論の暗示も
マルサスの著書に負うと云われている。しかし、それから四半世紀と
を自然法則的の人口原理に帰せしめたるマルサスの世子説が一方にあり、
社會主義的駁撃手に曝される運命にあつたことは當然である。

13
以後に新マルサス主義の理論の性質を理解する上は便宜である
と思はれりからマルサス説の社會的性質の問題即ちそれ如何なる階
級の利益理論であるかといふことについて簡單に觸れて置る。

マルサス主義 新マルサス主義の研究者として知られる吉田兼
夫氏はこの問題について大槓次の如く論じている即ち佛蘭西革
命の擁護者たる人たるポトシオンに對する又駁論の一事のみによつても
マルサス主義が既成勢力即ち一般的の云々は大地主、資本家の
理論的代辯であることは推測に難くあるところであるが更に立入つて
見ると當時の英國は教度の革命と改革とを経て立憲制度を
樹立したけれども而も大資本家階級を含む地主階級の
手にあつた。そして中小資本家、独立小生産者、職人、徒衆、及び
新たに発生した賃銀労働者は單に政治に参加し得ないのみ
ならず、經濟的にも沈淪の途境にあつた。この時に佛蘭西革
命が勃発した従つてそれは英國の上記の各階級の異常な

ルスから見たので、あるとすれば、ラティカールの攻撃の対象は権力の地位にあり、その頂点を占むセント政権である。ラティカールは或いは憲法協会の形によつてその運動を拡大して行つた。そしてロンドンでは事能くはなほ追いついていない。地方特にアイルランドに於ては既に騒擾の兆が現れて来た。英國は之を以て争つて騒擾を空気に包まれた。この時、佛蘭西政府は英國のラティカールを援助するために派兵の拳にあると噂が流れた。更に佛蘭西軍は既にアイルランドに上陸したと云ふ傳えられた。これは対立兩陣營に絶大の驚駭と刺戟を與へた。かくて既に事態切迫せりと見たセント政府は、こゝに英國空前と稱せられ、大弾圧の拳に本で、ラティカールは大量に逮捕され處刑された。彼等の罪は死罪と禁止せられた。又、終に結社禁止法の發布による漸く終りと言はれる。

如き社會狀態の下に於て「運各」一書を著し人口原理に據つて
「リベリカル」保持にゴトウインの思想を克服せんとすたか、
「自由」名の増大に於て、
「自由」かく彼の理論の社會的性質は自ら明かである。これば
一般的には當時の英國の持統階級の理論たることには疑は
ない。吉田氏以上の如く論じたる後、更に進んでマルサスの理論の特
徴階級中特に地主階級の利益論論であることと論起せんとす
るが、これはマルサスの穀物輸入税利反支持論に關する吉田氏の
見解を紹介するに止めよう。

マルサス時代の穀物輸入税制度は、この人間的に穀物
價格を引上げ、従つて地代をも人間的に引上げていたから、
地主階級は存続せんとする地主階級は、これを撤廃せんとする資本
家階級は、政治的に闘つていたから、マルサス時代の物上りによる
利得の大部分は残るぬすたに穀物價格を法律に基き、引下げるに
依つたから、大部分の土地の耕作を放棄せしめ、その生産
地と人口とを十分の以下に減少せしむる下は、穀物輸入

入税利度を支持した、吉田氏はこの点を指摘し、マルサスの資本
家階級の利益と犠牲性として地主階級を擁護したことは、抑てマルサ
スの所説が持権階級特に地主階級の利益理に及ぶことを論証せんと
してゐる。

三、新マルサス主義理論の形成

英國に於ける選挙法の改正、穀物関税の撤廃という三つの出来事は、資本主義の地主に対する勝利を示すものであるが、資本主義の位置の確立の結果として、社會の中心問題は資本主義と地主との対立といふことになり、資本主義が労働者の対立と移すに及ぶ。即ち特権階級内の二大勢力の対立から資本主義が労働者階級の階級的対立の問題の焦点となつて来た。社會的情勢を反映して、マルサスの後継者達はマルサスの理論と資本の理論へと発展させることになつた。これらの理論に於ては、マルサスの基礎理論であるところの自然法則としての人口原理はそのまま繼承された。この部分の修正は、マルサス主義理論を最初に提示したものは、シエームス・ミルであるといはれてゐる。ミルはマルサスに於ける人口対食物の關係に代へるに、資本と労働人口の關係を以てした。彼は労働力は需要(資本)と供給

正の法則といたつたのである

労働人口との関係によつて定まること。しかるに資本増加の速度は人口速度の増加に及ばないものとす。ミルは生産を最終的に決定する要因と土地であると見たが、土地の生産力には収穫遞減の法則の作用するが故に資本に対する報酬は引續き減少し従つて資本の蓄積は漸次困難を極め終には停止の段階に到達する。及之人口増加の傾向は人口増加の速度より速く均等傾向を有するといふのである。以上の如くミルはマルサスの人口原理を修正し、資本と収穫遞減の法則という觀念を導き入れた。

ミルの説明は一見明瞭であるが、思案はるかに思案技術の進歩といふことを抽象して説かせるといふ点に注意をせらるべきである。故に収穫遞減の法則を認むるときも一言に技術の進歩の起る場合のことと考へれば土地の生産力は増加することになり彼が資本蓄積遞減理論は當然には成立しないといふ若し假令農業技術が如何に進歩しても収穫遞減の法則は依然として眞実であるとす。

張するといふは、それは、史的事実と矛盾することになる。この理論は、古から下、古東人口の次第に増加せることを認むる限り、人類の生活標準は終つて下の路を辿つて苦むるが、史的事実として、人類の生活標準は原則として古東着実に上昇して来てゐる。一、史的に収獲遞減することを事實とせなければならぬ。

また、ミルの資本の概念については、矛盾の存在が指摘されてゐる。即ち、ミルは、労働を資本と労働人口との関係から説いたとあるが、この資本は、或いは労働手段及労働対象の外に労働者の生活資料、資料をも含むものと解されて、一面を小はるが、労働者の生活資料と資本とを除外して、史的生産手段の意味に解されて、史的生産手段の側に見れば、史的といわれる。

次に、ミルの矛盾を救済するとして、史的マカロシクは収獲遞減の原則による収獲遞減を以て永久的原理とあるとして、ミルによつて、史的増加のより大なる傾向を立記し、史的技術の取進歩による収獲遞増

増を以て一時的原理なりと。之によつて生活標準の決定的上昇の事
美を説明せんとした。かくして、ミルの第一の難点は克服されることになりた。
労働賃金については、マカソックもまた労働者は有ゆる場合、於て分母であ
り資本家は分子であるとして述べた。この資本は級にあり、生産
手段の外に労働者即ち労働者の生活資料をも含むものとされている。
この点、ミルに於ける如き混乱は、たゞ「資本はミルに於ける」とは
異り、直ちに労働と需要するものからいへば、その資本家の意向が
加わるものとして、たゞ労働の雇傭に充當するべき資本について
は、資本家の意向という漠然たる要素が介入するものになり、資本
本と人口との増加力の比較は不確定な西文素の上に形成されると云ふ難
点が生ずることになりた。

この缺陷は新マルサス主義理論の確立者として、シロウ・スミス

ート・ミルによつて除去されたい。

ミルはマカソックの説も勝敗し、労働人口を需要するものは直接には

マルサス主義の基礎 ~~理論~~ 確立される事にはたがひがある。

ミルの労働賃金説に對しては多くの反對論が叫ばれた。ミル
の反對者の一人 ウィリアム・トマス・ソートンは労働賃金論を論じて存在
を否定して次の如く論じている。即ち若し一國全体として一定の
労働基金が存在するとするならば、その基金は國民中の雇傭
者の部分と所有者若干の個人による所算されるより小なる同種の基
金の統計以外のものはあり得ない。然らば個々の雇傭者は、その基
金を所算するものであつた。個人の資本の中、其の所算者の必然的
に労働に費したければ、その持定部分があるであらう。然らば
雇傭者の所算する負債の如きは、それを資本として投するは彼の意
志により自由に決定され、更に彼の資本の建物機械、原料、労働に
如何なる割合を以て投するかは、個々の場合に於ける特殊事情に
よつて変化しうるものである。従つて個々の雇傭者は一定の労働基金
があるを所算するのではなく、個々の雇傭者は、如何なる労働

貴貴金なるものを所有しはいとすれば、この貴金の統計たる國民的
分價貴金は存在し、たゞのこと、あらざるを得る。

ミル以下との如き、ソートとの批判に接するや、自己の見解の誤か
るを認め、極めて淡白に労働賃貴金説と放棄するものと共に、その歸
結たる労働運動無効説をも、その科学的根據と失はしむ。其
棄した労働賃貴金説放棄後、ミルは労働運動は絶対に無効
であるとは考へなく、たゞはとも、労働者や團結の力によつて、利潤
と犠牲として一般労働賃の増加を獲得する力も限られて居り、然
労働者の三限界以上の去やうと企てる所ならば、それは單に労働者の一
部分と永久に就職せしめられに置くことに依るのみ違はらざるであ
うと考へる。労働運動の效果は極めて限られて居るものがあることと
主張して、またミルは労働賃貴金説は放棄したか、人の増加抑
利論は最後まで撤回しなかつた。それは労働賃貴金説の労働運
動の效果は極めて限られて居るものと考へたからであらう。

さて労働賃金説も理論からは當然次の二つの姉妹が主たる第一
は資本の利益であり第二は労働運動の否定と社会主義の反対である

労働賃金説の中は一定の時賃に於ける労働賃金の一固定不變と

想定し、一定の労働賃金と労働者人口の分配するところを主

張とする労働賃金全体との見かけは、それ以外の関係による労働賃

金と、そこで労働賃金を引上げ労働者が増え改善する唯一の手

段は労働者人口の増加を期することだけならば、労働運動の

如きものによる労働賃金を強制的に引上げやうとするか、それ以外に

るか、又は一時的労働者の利益を犠牲にするか、と失業せしめ、又はその

労働賃金を減少せしめて労働賃金を高めようとするか、これに於て

労働者階級全体の利益は少くも伸張されるか、労働者は労働賃金

を引上げるに團結して資本家と闘争する権利を見え、また忠告者も

そう考へるの常であるか、又は労働者階級の内部に於て労働者同

志の戦い、過激派、闘争の勝利による労働賃金を引上げて成功し

すべしすれば、そのにありし失らるるは資本主義の他、労働者にはけり
あらば、之より労働賃金説の導く必然の歸結である。

要之労働賃金税の歸結の、積極的側面より労働者階級
の労働生産を高め、その境遇を改善する唯一の方法は労働者階
級の人口増加の抑制にあると、之を以てあり、消極的側面より労働賃
引上げのため労働運動は労働者階級全体としては示さざり
其の他人口抑制以外の方途による境遇を改善せん事、凡ゆる
社会主義的企図は誤謬である、と云ふこととなる。フリスス、ウニシカ、労働
賃金説を評して、この説は雇傭者として極りの満足は説が
あると云つて、いかゞも、労働賃金説は如何なる社会的性質と有、
するものか、其のを指摘したものと考へらる。

さて即ち述べた如く、此は自ら労働賃金説と批棄するに其に
當然の帰結たる労働運動の論議も批棄した。よるに、此は
よく批棄される後、然るも労働賃金説は社会的には死滅せず
却て実践運動の中に活況に餘命を保存する、即ち労働賃

新マルサス主義論者の平と離れて俗事に入り易い形に通俗化
の論議は、実践に移さざる事は長きものである。取早理論上の嚴
密は、一定を加えては、單に子供を産めば勞賃は下落し、子
供の未來を制限すれば騰貴すると云ふ簡單な形で説かざるようには
なした。新マルサス主義運動者即ち通俗的新マルサス主義者には、
基礎理論の如き民衆に理解せざる限度に於て述べれば充分である。
不民衆の理解のために嚴密な理論を却つて邪魔である。重要
なのはその帰結とその実践に在る。新マルサス主義論者
は次の如く主張する。即ち勞賃を引上げ、勞働者階級の境遇を改善
する唯一の方法は勞働者人口の増加を抑制することである。マルサスは勞
働者階級の状態を改善する唯一の方法として所謂道德的抑制を
推奨した。これは一家を支持する見込みが立つる結婚を延期し、そ
の間貞潔な生活と維持せよと云うことである。これらは事實上
少くも有効を得る方法である。何と云へば一家を支持し、うらに云ふ

また結婚を延期し、その間貞潔な生活を維持するといふことは労働者階級の間の一般的に行われない見込がある。また假令それが行われるとしても彼等が結婚した後、多くの子供を産むことにはなれない。結婚延期は事実上無意味となる。また結婚後一人の子供を産んでもこれを正しく扶養することは、婚費を要するから結婚を延期するといふ事には、大多数の労働者は事実上生涯の独身を強いられることになる。マルサスの推奨した方法が事実上実行不可能と云わなければならぬ。そこで採らるべきは、唯一の方法は、反胎調節と伴う結婚といふことだけである。

新マルサス主義者の所論については、章を改めて述べておくことにするが、その中に克立ちろい、既に一言解かす置いた処の、反胎調節費金説の有極的歸結、及び社會主義者について、吉田氏の所説に準據して、同輩の處置を行ふ置きたい。

この社會主義といふのは、亦い意味で、そのホである。新マルサス主義

等々、其のた當時の所謂 社會主義は貧乏の原因を負債者以外に求めんとする一切の主張を排して、た當時の社會主義

の中心は特に勢力の大であつたものは土地社會主義であつた。これは嚴

格な意味では社會主義ではなく、資本制社會の間に於ける土地改革

論に過ぎないたのであるが、當時の考へ方としては負債者責任を労働者

自身に歸せし、之を社會批判の中にも求めんとする限りは社會主義

會主義的なるたのである。そして新マルサス主義者による社會主義

に對し、執拗に挑戦したものである。土地社會主義の代表的なものでして

はヘンリー・シヨースの土地私有廢止論である。彼は進歩的負債者

一八八〇年頃の書物に於て物質的進歩の負債者を軽減せし却て増

悪する傾向があること、そしてこの解決策として土地所有の社會化を

論じた。即ちシヨースによれば物質的進歩の真確中にある労働者

の境遇は益々悪化して行く原因は資本と労働との関係の中にある

ものである。また生活資料に對する人口の圧迫の中にあるのである。

土地の及前勞價と利息とを懸念して居る地代入廢止の主張
に力がある。

ニコーシハ説は資本家的生産利自体の問題として

眞の社會主義はよく其に根本的に見れば新マルサス主義者との間

に左様大きな理論上の隔りはあつてゐるが、ニコーシの見解は勞動者

に他を責める理由を與へると云ふ点で新マルサス主義者との間に社會

主義者なりと一線は引け攻撃を加へた。この新マルサス主義者の主張は

るところは要するに人口原理に存在すること、そして人口原理に着眼目

を以て土地國有論の如くは取るに足らぬとす。正大に及び、その攻撃

は常識的感情的であり理論的には反あり重要なりとされてゐる。

次に新マルサス主義者のほゞ先はカールクシキリに向けられた。

カシキリの批判は小ながら彼の比較的初期の著作である地社會進

歩に及用才人口増加の御書であり、後に彼のマルサス的立場の書は

4

自然と社會とに於ける増殖と進歩は、資本に於ては、
 はマルクスと痛烈に批判し、社會主義と公然と權護し、
 といは偽マルクス主義であり、新マルクス主義と餘りか
 評してゐる。新マルクス主義者は、カウスキーの説を以てマル
 クス主義ありとて反駁を加へたのである。

カウスキーはマルクスや労働賃は需要供給の關係に下して定まり、供
 給制限のみが労働賃を高くするに對する方法であるといふが、
 限と問題に於て前記の如く需要供給の關係のみを探討しなけれ
 ばならぬといふ如く述べている。即ち資本は不変資本と可変
 資本とに區別される。この可変資本とは生産手段たる資本であり
 生産過程に於て其の價値を増減し得る故に斯く呼ばれる。之に及
 び可変資本は生産過程に於て價値を増加するものあり、労働力の
 支持に充てられるものあり、この區別の意義は極めて重要である。
 ないしは労働の價格が依在するものは労働と資本一般の比ではない

下りく又も労働者の過剰へと道すがら労働賃は下落せざるを得ず
かく見るとマールサスの提案による下労働者階級の状態は決して
改善されたいと云わねばならぬ。これは資本利生産力の下に必
ず労働者階級の必然的運命付けられているところからである。

以上の労働力需要供給に関するカウツキーの見解であるが然るに労働

働者階級の資本利生産力から解放される時には果して人口過剰

は存在しなくともかきみらぬという問題が生ずる。この点に関するカウツ

キーの見解はマルサスから余り隔てないが即ち彼に於ては福祉の増進

は寧ろ未熟な所から起り知識の増大はその減少を惹起せしめ

るが人口運動は小と大とを区別して却て大となるというのである。この増

大とする人口は充分に支持されうるかという問題に於てはカウツキーは彼は

労働生産物の分配を被圧階級の利益とする如く変更せんとする

旨の主張をする。若しこの同時に入地への生産力の増加に伴ってある

は夫故に弊せしむるを得ない。工农业生产力の増加はカウツキーはプロレタ

リポートの伏態を長期に亘る引上げやうとするに依る。試みは無効
と見るべきである。カウシキーの主張は結局農業技術の改善による
収獲増減の結果を扶殺せんとする議論に過ぎない、といふ。
それによつて次に土地の生産力の増加による人口過剰の危険は存在
しないかといふ問題についてはカウシキーの答は否定的であり、より高い
経営方法への推移によつて人口過剰は延期されるに過ぎないといふの
である。かくして過剰人口の危険は社会主義の実現によつて一層増
大せざるを得ないといふのである。二つへの対策は如何にあるべきか。社会
主義の抛棄案の或いは否か。適當な手段を講じた社会主義と
維持すべきかといふ問題が生ずる。カウシキーは云う生れおりの減少
するべかりに出生と道徳的方法の減少すること。二つが人口問題の今日
可能な解決法の中唯一の満足すべきものといふ。こゝに結論は新マルサス
主義者からいふと極めて類似している。カウシキーはマルサスを痛烈に批
判する。自らマルサス説に最も忠実なるものと云言ふ。社会主義者として

四 若干の點 マルサス主義者の所説

マルサス主義者の新マルサス主義の生成の動機は當時の社會情勢特殊の點から階級差を生ずる生活状態を如何に解決するかに在りし問題に在りし既に述べたる如くマルサス主義者といはれざる内比較的初期の論者たる所説の勞働者の境遇を如何に之を解決するに在りし問題に最重きを置いて論じて居りし所説はそれらの實國論の形を採りたるに當然の事である。この「光の進歩に伴ひ新マルサス主義」の狀態に在りし新マルサス主義論議の重きは漸次移動して行く。新マルサス主義思想の普及に伴ひ十九世紀後半頃より西歐諸國の出生減退の現象が顯著となり及ぶ新進學問の問題、新マルサス主義の主張の上には是は地味を占むる係りに在りし不勞働組合運動の中心、近世的女性運動は人間解放、自由、平等を目標とし、伴ひて生命の副産物として十八世紀に端を発し、以来淫慾に厲用されたりし結果として果ては「人女性解放運動」の目途をとりしに至り、胎調節の主張が今日に至り胎調節論として大に地位を占めて居る。

かくも如く論議の中心が移りていくと、そこから思想の根底に流れるものはマルサスの私人の観測であり、労働、貴金論的の考察などであるから、主として新マルサス主義の論議として統括することはお察である。十九世紀下り今見ると、新マルサス主義者への新説を纏めて紹介するものは、本誌の旨のからい、その中心要諦は比較の初期の新マルサス主義者として、フランシス・ブレイス、その他一、二の論者によって、より比較的最近の論者として、マーカレト・セカチが所説を簡単に紹介し、新マルサス主義論説の概観を描きつと、思ふ。

新マルサス主義は最初誰に由来する主張されたかの問題については、著者の意見は必ずしも一致してはいない。その受胎調節の問題に最初触れた者は、ミエーハス・ミルであったと述べている。そのミルは、新マルサス主義理論の建設者の一人でもあった。ミルを以て新マルサス主義の始

と見ることが、理由の異なることである。ミルは、新マルサス主義の受胎調節は、単に暗示を以てい

は、新マルサス主義の受胎調節は、単に暗示を以てい

受胎調節と伴う早婚を明白に主張したのには

プレースの地位の本質的である。故に受胎調節を明白に主張した

プレースの地位の本質的である。故に受胎調節を明白に主張した

プレースの地位の本質的である。故に受胎調節を明白に主張した

プレースの地位の本質的である。故に受胎調節を明白に主張した

プレースの地位の本質的である。故に受胎調節を明白に主張した

人口原理を認めると共に、其に基いて、人口原理の論證が、本邦の

早婚に對する理想を達成することの出来ざるを考へた。

大好釋か生むることか期待し得よう。殊に健康を害することなく

ハ女性ハ優雅と破壊するごとく受胎と好む子如き予防的方法を利用

ハ罪悪及露骨は異常なる転回に於て社會的除責を得る。

之マルサス、ホドランニ及ん其レ他カ凡中子博愛系ノ目的ハ促進スルコト

ハ尤も以テス如クブレースハ受胎調節ハ社會的負擔ヲ窮乏之 犯

罪ヲ除去シ得る唯一可能ノ方法ニ於テハトモハ下子ハ同時ニ道德的狀

況ヲ改善するモノト考スルハ如クイヘイ子 却テ早婚ハ子數ノ數カ少シ

ニ合ハシ西類と子供ハ双方トモ最モ道德的且幸福ニ状態ヲ與スル

ハ下子ハ 妊婦ヲ減少する最モ有効ノ方法ニ於テハ 乱講ハ内賣淫の

手段トシテ行ハルモノトモ之消滅トシテ之を以テ 受胎調節ノ方法カ

順に行ハル時トモは道徳ハ大ニ乱ルモノト考スルモノアリ 且知カ

多カクハ一カ一方ニトシテ 赤貧ヲ消滅シ 各人カ立テ長久ノ幸福

トモ得ルコトカ 社會的負擔ノ場合トモモ 性道徳カ

乱しを考ふることは困難である。さうしてその方法に於ては、困難もなからず、救済の利度と負担をなくすこととが本意である。

マルサスの主義 聯立の発端をいふト、マルサスの著「社会学

の果実」に於ける受胎の神祕論と概観しやう。
受胎神祕論の神祕論は、政治の神祕論に於て、増殖本能の満足に伴う快楽を犠牲とすることなるに於て、数と量との儘に制限しうることを

人類として如何に望むべきかと證明せんとした。先づ政治的見地より

論じたるより見ると、彼は人口増加が絶対大である一世紀間六三回

増加するであろう。若し人口増加が絶対大であるならば、人口

増減の必要もあつて苦難も死滅するに及ばぬと云ふ時が来るであろう。

マルサスは、独身以外に何物をも興へないならば、人口増加の必要もあつて苦難も死滅するに及ばぬと云ふ時が来るであろう。

紀願瘵の傾向があるから大に神難をかけるわけがある。それは、責任

不節制を驚かす、程度に増加せしめ、健康や道徳感情を破

環^ルる^ルも^もい^いて^て 飢^飢餓^餓と^とい^いは^はし^し 諸^諸害^害悪^悪に^に加^加え^えて^て 更^更に^に知^知と^と隷^隷
 疾^疾生^生じ^じ 社^社會^會の^の改^改善^善は^は期^期せ^せら^られ^れた^た 従^従て^て 婦^婦女^女は^はつ^つく^くる^る 如^如乎^乎、^のあ^あつ^つ
 る^る 亦^亦た^た 以^以に^に 社^社會^會的^的 見^見地^地に^に 立^立て^て 論^論ず^ずる^る 処^処を^を 見^見る^るに^に 貧^貧民^民は^は
 劣^劣産^産の^の 極^極貧^貧に^に 陥^陥り^り 罪^罪惡^惡に^に 駆^駆り^り 立^立て^て ら^らる^る、 母^母の^の 健^健康^康は^は
 一^一く^く 害^害す^す、 且^且 工^工女^女の^の 健^健康^康と^と 産^産の^の 健^健康^康は^は 一^一く^く 害^害す^す、
 未^未婚^婚者^者は^は 以^以て^て 見^見る^るに^に 未^未婚^婚の^の 見^見地^地に^に 有^有た^たら^らば^ば、 一^一更^更に^に
 婚^婚を^を 延^延期^期し^し、 且^且 同^同に^に 彼^彼等^等の^の 屢^屢々^々 不^不道^道徳^徳な^な 行^行為^為に^に 走^走り^り 健^健
 康^康と^と 道^道徳^徳感^感も^も 破^破壊^壊す^す、 且^且 彼^彼等^等が^が 若^若し^し 最^最初^初に^に 選^選擇^擇し^し た^た の^の 結^結
 婚^婚、 一^一つ^つの^の 見^見地^地に^に 一^一つ^つの^の 父^父と^と 一^一つ^つの^の 母^母と^と 延^延期^期し^し て^て いた^{いた}ら^らば^ば
 考^考へ^へる^る 不^不幸^幸は^は 故^故に^に 考^考へ^へる^る 犯^犯罪^罪は^は 防^防止^止さ^さる^る、 且^且 一^一つ^つの^の 主^主張^張
 した^た 彼^彼は^は 受^受胎^胎調^調節^節の^の 実^実際^際的^的 方^方面^面、 詳^詳細^細に^に 叙^叙述^述し^し 行^行う^うる^る の^の 一^一つ^つ
 次^次に^に マ^マル^ルサ^ス 主^主義^義 聯^聯盟^盟の^の 中^中心^心 人^人物^物 たる^る ア^アニ^ニハ^ハサ^サニ^ニト^ト の^の 所^所説^説と^と 概^概観^観
 一^一つ^つの^の 見^見地^地、 一^一つ^つの^の 見^見地^地は^は 彼^彼女^女の^の 宣^宣傳^傳用^用 ハ^ハニ^ニラ^ラレ^レト^ト、 人^人口^口 強^強則^則 に^に 於^於て^て 終^終



この生活には生活資料よりも速かに増加せんとする傾向があるといはる
と人口法則と呼んでいる。此で人口法則の結果たる貧困と窮乏之
から逃れる唯一の方法は手に入らざる生活資料の鞅田に人口を制限す
るにある。マルスは道徳的抑利を提議したか。これは有效なるかは
あらうか。併しそれは重大な且致命的な政陥をもたせり。一つの
害悪に代るに他の害悪を以てするに過ぎない。若し嫁娶一般に
行われざるならば貴族利益を拡大し永久化するがあらう。それは
厳格に独身生活を送るものに於ても亦害悪は生ずる。結婚生活
こそ自然的な生活であり、独身は不自然なため。これによる肉体的
故障が生ずる。即ち独身生活を送るものは致命虚弱となり、その
上早産しまた疾病を惹起する。それ故如何なる観点から云へども
晩婚は賢成を意味する。これに及ばず早婚は肉体的にも道徳的にも最
善である。のみならず結婚から生ずる子供はそれ互に年
に接近し、数多く生れ過ぎない限り中年的両親から生れた子供は

りも活気に富み且つ健康なり。またかゝる子供は父は当然と人子
の生涯の初期に彼等を助かり相談相手となり得るといふ利益が及
ぶ。

以上比較的初期の新マルサス主義者の若干についてその所説の概要
を紹介したものであるが、これに大なる見事に彼等の論議の重点が貧困・
六病の同様に置かれて居ることは明かであるが、それと共に極まりて廣汎
な見地から例へば優生學的な道德的の立場からも論議されて居る
という事は新マルサス主義の失的變遷の上から注目されなければなら
ないことと考へられる。

次にやゝ最近に於ける著名な新マルサス主義者としてマーカレスト・
ニカースの所説についてやゝ詳しく紹介して見たい。

マーカーストはヨーロッパの貧困地区の保健婦であったが類聚なる狂気の

養育のしる未来の子供の増加にまつて女の上に課せられる不平等
目撃した。この人類の悲劇から逃れよう法として、この貧

母胎論を以て胎論の中心論として論議する。奴隷はこゝに運動の中心を以て
けり。為に獄に投じられたりある。

サカガハの反胎論の中心論は女性解放という点あり。
この解放を通じて始り民族の進歩もたらされ得るといふのである。

人類の歴史に於て嬰兒殺や墮胎が刑罰にも拘り古今東西を
通して行われたいは周知の事実である。この原因については経済的に

説明するの普通通であるが、サカガハは之を寧ろ社会的に説明せんと
している。即ち彼女に於ては奴隷の行為は女性解放の手段として意

識的に行はれるものがあるといふことである。然るにそれらの行為は性
の奴隷利からの解放。單なる用生産用具としての女性の解放の

叫びとして、またかくる奴隷制度を保存してゐる。此の社會制度の交
換として現れたものであるといふのである。女性か奴隷である間は女界

もまた奴隷化されざるを得ない。自発的の女性制度即ち女性に自らの欲
せし子孫を生まるゝといふことより女性解放の手段であり、こゝに自

発的母性制度の実現は同時に諸々の社會要を除去する事になる
といふのである。以上サンカールの主張の要點である。こゝは見從來の新マル
クス主義とは異つた外觀を呈してゐる。しかし彼女が主張を些細に味
するときは、それ下余りにもマルサスの説であり、既述の新マルクス主義者と
の根本的一致が見られるのである。以下サンカールの新説をその著者「新
女性」に基いて紹介しよう。

先づサンカールは女性の使命を説き、今日に於ける女性の地位、奴隷
的地位からの解放を叫ぶ。即ち女性に男性の作爲、法律、慣習、下
服従を強いられてゐる。女性に考へ方や一般の生活上の同題の解決はた
余りに男性を模倣し過ぎる傾向がある。こゝに女性に男性の仕事を
するに於て生かすものがある。女性の使命は女性の精神の表現にある
それは男性はたゞ作られた社會を保存する事である。男は巾着活動
に女性的要素を落し込まず、男性の境界はたゞ人類の邊
界を越えることにある。この使命を達成するためには女性に彼女を縛り

ついでに鎖を解き、奴たたりはるらむ。女性を解放は五十年教會と國
家による束縛を断切り新なる道徳を樹立することにある。始りらむれば
はるらむ。福音の性道徳の觀念の大部分はキリスト教會特にローマ
教會に得るものがある。今日に於ても教會は結婚を公認する。権利と結
婚をもたらさず、首ゆる事柄に對し女性に服従せしむるという一義に
強固執している。その實際の働きに於ては、教會の性道徳の法典は
妻の肉体と奉侍關する限りは、下位の男性の本来的権利を強調して
いるものがある。教會は純潔に保つて、口實の下に女性を再び知らしめる
こととしている。一々目的のために、教會は國家をその道徳の聲言者として
用いた。男性は既に教育の力による、僧侶の支配力の大部分を破
壞した。女性もまた教育され、その信あるところを公然と述べる権利
を主張した。ふい、教會は今日に於ても、女性の問題に關し、その最後
の支配力を保持すること成功して居り、一歩を教會の支配力の最後
の滅亡とせしむるに繼りつこうとせしむる。若しキリスト教が一般の進歩と

を可能にする。むしろ素朴地として、新しき性道徳即ち自発的女性の

性道徳を確立するといふことである。かゝる性道徳が成立するに際しては

女性の本来的使命を、^果すため自由を得ることになる。民族は女

人肉體の擴大を以てたもろより、母の抑圧は人類の進歩に不利である。進歩の

諸々の要を生ぜしめる、人類の進歩は母の女性として完成される

みまにりされるというのである。サニカールが主張するに、よくよくよく

見れば母が欲くさいとて、下子供を産まざるといふこと、即ち女性調

節の實行に於てその母の肉體的、知的、精神的發展の換骨の

えられ、かゝる女性の向上による夫婦の間は愛と交感、文徳及生

活の完成と意欲の増進される。かゝる夫婦の關係こそ、^いこそ新しき生

命の芽をさすべき土壌である。そこから生れた子供は夫婦による愛

の花の如く人類の進歩への頂冠を冠するといふのである。

以て、かく受胎調節は女性としてその服従的地位から解放し

女性のみならず、その夫子女、社會及世界に對し無限の幸福と

東は強く反省さなければならぬ。屬々の生産は母の活力と夫の以
日夜にわたる子供への話け彼女を非常に疲れさせ、可憐な羊頭
既に老衰している。大衆議人父への影響は母の非人慘な母の
おらの父もまた肉体的衰弱し、精神的に沮喪し、希望と夫を
受胎調節はやくも事能ハ叔済業として有教な母

妊娠時に於ける母の恐怖憎悪の影響は母の知らず知らず
か、妊娠時に於ける継続的強烈な情緒が子供に生命の上に深く
象づけられることは有り得る。私個人(サカシ)の意見として、
胎毒は大きな母の、臆病、焦燥、虚弱の原因となり、母の信じて

として、妊娠恐怖の原因は、子供に重荷と窮乏の母
又欲する子供は通礼礼具として死するが、饑餓と放任の状態
は、其の生活環境は悪い。彼等と母をいさめるは、早産と精人澤
有るに母の施設を致すこと、屬々の母

女の母と、いふ点に關しても、貧困は母に於て子供に残忍な打撃を

賈誼は貧困放任の結果であり、それは更に適當の養育を得ない故に、
家族の原因として、賈誼が生活して、少女の生活と家族の生活と
間には直接の關係がある。不十分の養育、過度の恩寵は、育小の
際、兩性の雜居——それは自然的な——を、自利の心と破壊

する。また労働の過剰、身なりに供給過多、ひいては苦しい生活、大家族
の小児も、労働の疲れ、立ちまわること、なり、これは産業總備軍と共、
過産による膨脹、一人は戦争の根本原因となる。以上如く種々の
善悪、結局女性の性的不健全の狀態から生ずるものか、女性
の、状態のより、扱は、言はは、た、自然的女性利度と關する、
自ら積滅、下、という、の、考、え、の、身、

以上、如く、サカ、主張、は、一見、従来、の新、マルサス、主義者、と、甚、しく、違
異、に見える。しかし、サカ、の、主張、を、吟、味、し、て、見、ると、その、根、底、は、
サカ、の、人口、原理、の、前提、を、わ、けて、居、り、また、社會、改良、の、要、を、各、個人、

貴族主義の説を居り、その経済理論を労働 全説を採用

と云ふも、この真を認めざるを得ないからである。サニターに思われる労働賃金は、全説的の考案方、及社會主義的論調を承けておられる。彼等は、

著書に於て若干の部分を引用して見よう。彼等は云々、前記の生産及分配、量に於て、今日機械の發明される以前に比してより少い労働力の必要

と云ふてゐる。ふし、その労働者数が増加する。労働者は機械によつて、自由になるが、それに反比例した。我々は、昔の社會問題の責を負ふ日本主義

と云ふ、這會主義の、残忍な産業組織に歸する。その中から近代産業が起る前に既に我々の数は莫大であり、我々の雇従は悲しく、心へきものと

いた。我々のトラストを以つても、おれは、かゝる我々の雇従は、トラストの進化、頭腦から出現する前に既に完成された。労働問題、失業、低賃金

の、この道は、生産をやめることである。よりよき労働賃金、より短い労働時間、よりよき道は、労働者数、より少くすることである。労働者の受給額

即ちより直ちに獲得するものは、其利の何れ、や一は小家族に現在より

労働者に及ぶ大家族の減少は、労働者の食料、衣
服、教育に及ぶ所を、農民労働者の家族の少くは、主として
非需要の増加による高騰による食料の価格騰貴に抑えられ
る。第三に教育に及ぶものは、軍事を止め、競争する労働者の数に
少くは、労働者自身の容易に彼等労働の生産物のより多くを部分
に全部と得ることを要求する。第四に、少くは、事柄の起る一に於て疾病
的、腫瘍、王伴の如く、貧民家や、そのに伴う汚染、附随物は自働的
に失する。第五に労働者は、少くは、子供供はより健康に
勇気ある、道徳人類に相応するものがある。組織的、受胎
即運動は労働の全問題を解決する。受胎調節は十分に行われ、
如何に、社会組織も労働者のためにあり、社会主義も其相
互に理想を維持するものは出来る。以上
以上所説に於て注意するべきは、従来の新マルサスの主義運動
象の労働階級を及ぶに對し、途かに廣くならず、富裕階級

に於ける大家族も不道徳なりとて非難し、いふことあり、サニカ

には、女性、自己の肉体を支配する権利、自己発達、自己表現

という自然の権利と犯すのみならず、社会の貧困階級を圧迫するから

である。即ち若くは上流中流階級の過去五十年間貧困者の再生産と歩調

と同調したとすれば、今日の労働階級は一日の賃銀として手に二三杯の米

しかもらえ、支那人の生活水準に抑えられたのであらうからである。

最後は受胎調節論に対する、又討論に対するサニカへの批判に觸れ

サニカへの所説の紹介を終らうと思ふ。

サニカは民族自殺論に反対し、受胎調節は決して民族自殺を意味

しない。却て大家族こそ民族自殺を意味する。受胎調節は母の健康を

害するより、母教死にたつたのであると云っている。

次に産児調節の知識が若い者へ不道徳を奨励し、母の健康を及ぼすに

つて、不用意にその知識がなされる、は恐らくその危険は甚だしい。性病

の流行し、やがて敬告される、扶養能力が、内は子供と産むに必要である。

ら結婚出来るというものが教えられる。何時結婚すべきか知識や与えられる。それは産見調節に若い人々と誘惑から遠ざけることによる道徳的改善に役立つといふのである。

以上サカーの新説の大略を紹介したものであるが、サカーの新説の初期の新マルサス主義者とは可成り異なつた視野から論議がなされてゐたといふことは事實である。即ち初期の新マルサス主義者が中心問題としたものは労働者階級の境遇と如何にして改善するかといふことである。貧困の問題である。この問題はサカーに於ても勿論問題に上つてゐるが、サカーの新説もつゞつて見れば結局この問題に歸着するものばかりかと思ふのである。サカーの外に現れた処に於て見れば特にサカーの力美を道徳的この問題は女性解放といふことである。優生学的考慮も可成り入るが如何に上つて来ているといふことは云へる。さうして新マルサス主義の問題の中心は如何に變化したかは如何であるか。

これについては然る間に於ける時代の變化といふことが當然考へられなければならない。

りらんに 時に産業革命の完成と進展したる一時期社会最大関心
事たる長賃銀のともく緩和されたといふこと、及十九世紀末の人口増
加率の減退、見事に至つたといふ事、此に伴つて従来資本主義
的に考へられていた事柄が内心の中心に據り手落ちするに至つた事は
明かである。

この頃から思想の根底に於て初期の新マルサス主義者とサンカーム
間には新マルサス主義者として最も本質的の点に於て一致を認めよう
とする。即ち第一にあり大なる傾向として人口増加の思想換言すれば
マルサス人口原理の上に立つてゐること、ヤニ社会の善悪を除去し社会制
度へのほろく個人が責任に歸してゐること、ヤニに債銀貴金説の考
ふる方の上に立つてゐることである。

五 新マルサス主義運動

新マルサス主義の本質は理論よりも寧ろ社會改良の實踐運動に在り。その理論も運動者の主張として現れてゐる。その故に運動を離れては新マルサス主義は理解されない。新マルサス主義の歴史は、その初めから現代に至るまで詳述することは新マルサス主義の概観と外國の本文の目的から必要と見做す。ここに簡單に論議を止めて置きたい。

新マルサス主義を最初に労働者階級に宣傳したものは、フランスのポルヌワール。彼は人口原理の論証として書いた翌年の一八二三年に結婚した男女に、労働者の結婚した男女に、上流の結婚した男女に、三つの小冊子を書き、労働者階級の配布に、實踐運動を開始した。この外彼は自己の知るところに於て労働者に新マルサス主義を説き、労働者新聞に投稿し、また國會議員や大學教授の人口問題、労働問題に関心を有つものに新マルサス主義を宣傳する。

た。彼の努力の結果熱心な共鳴者を得ること出来たが、その内の

一人はリチャードカーライルであった。カーライルは最初はアレーヌに反対であつたが遂に彼の説得に服し新マルサス主義の強力な支持者になつた。彼は自己の雑誌「リパブリカン」に於て執心して新マルサス主義を擁護した。一八三六年には「婦人心機」という小冊子を書いた。この書は非常に普及を見たといわれている。この書物は反胎調節理論と實際とを論じた英文最初のものとして重要視されてゐる。

それから初期の運動は不思議にも何等の法的干渉を受けなかつたが、社会的には多大の非難攻撃を受けた。しかし、この等の非難攻撃にも抱き合ひ親マルサス主義は次第に民衆の生活の中に浸透して行つた。一方、目をアメリカに移せば、こゝでは既にアレーヌやカーライルが影響を

受けつゝあつたから一八三〇年には英人ロバート・オーウェンは「道徳生理学」とする一書でニューヨークに著した。これはアメリカに於ける反胎調節擁護の最初の書物で、主としてこの法を論じたものであるが、その版と重

61 ねたという。次いで一八三三年内科医のチャールズ・ノシルトンの「哲学生理学の
果実」が出版された。この書物はオーウェンよりも一層詳細に書かれた居

り、医師が書いた最初のものとして新マルサス主義運動史上重要な文
献の一つとして扱われている。この書物は如何の程度普及し、彼の有名な「ランド

ラーフ・ベケット事件の誘因となった。ノシルトンは後アメリカに於ける初期の新マルサス主義
ルサス主義文献の現れているが、アメリカに於ける初期の新マルサス主義

運動は著しく発展を見せ始めた。しかし資源の豊乏は人口稀薄で
発展期に於て當時のアメリカの社会経済状態の然るべきであることがわ

らう。この特殊事情の一つの現れとして一八七三年には定額調節基金
法規が及び、コストック法の議案を通過している。

爾來英國に目撃すれば既に一八三〇年頃にはアメリカが出版された

「道徳生理学」及び「哲学生理学の果実」の英國版が現はれた。この「道徳生理学」

イギリスの婦人心博「ヤソ」他の著書と共に自由に販賣された。此の「道徳生理学」

一冊に至ってノシルトンの「哲学生理学の果実」は発行した書店が突然「複製書」と

して本販法違反と同様の出版者は處罰された。この「道徳生理学」

マニフェストと「パンデット」は言論出版の自由、新マルサス主義の防衛のため
に起ちて共同して「協会の果敢」と出版し公然と販賣し、しかもこれを
當局に送附して批戦した。兩人は直ちに逮捕せられたり、法廷に於て
執心は新マルサス主義を擁護した。この法廷闘争は一面の視聽を以つて、
期として新マルサス主義の弾圧の立場から全く逆効果をもたらし、
この有名なパンデットラフベサント事件である。

この通りさす「パンデットラフ」は新マルサス主義宣傳のため組織を樹立せしめ
ていくたか、いまその機は執つてつた。しかもこの計らうも一事件の機縁
となす、人口問題に関する討議を仰せんとする企図に対する積極的消
極的抵抗をたさんかためにマルサス主義聯盟の組織を小ることにたつた。一八七七
年の事である。マルサス主義聯盟の初代總裁にはトウライステールが、まに名
譽書記長にはベサントが、選はれた。聯盟の副總裁には方々の外國人が選任さ
れた。以上が、以て聯盟の國際的性格を規知し得る。聯盟は創立の初より
には月刊機関誌「マルサス主義者」を刊行し、聯盟創立の動機が

か言論本版の自田の確保と新マルサス主義の普及にあること、既に述べた通りである。新マルサス主義の普及といふは、當時としては先づその理論体系の普及が必要であった。その結果後掲誌の記事も最初のものはマルサス主義批判マルサス主義の紹介に可成りの努力を拂つた。その発行後数年経つと記事内容は次第に低調となり活動の中心はいよいよ実践的の方向へ傾いて行つた。

このことは新マルサス主義運動が民衆人間に偏重していったことを物語るものである。尤もこの間、社会主義や進化論ありする及討論と論争が盛んに行われ一時理論的色彩を取戻した。この主流は依然実践的の方向即ち受胎調節の具体的方法の宣傳に置かされて来た。アラスカドローフベサント事件に相次ぎてこの間に有名な事件が起つた。白種人トウルーラガはオーストラリアの道徳生理学。其の他の新マルサス主義の輸入本版一たかたがで告発され處罰された。これ所謂トウルーラガ事件（一八七二—一八七九年）である。新マルサス主義の普及は彼の擁護のために起ち、大きな會合を閉じ、執拗な演説と

と行つてゐる處まで推議した。

このトウルラフ事件が新マルサス主義運動の発展に寄與したことは前の
ブラントラフベカント事件と同様である。これらの事件は機として新マルサス主
義文献の需要は急激に高まり、民衆の間は普及徹底して行つた。新
書がこればかりの人口法則などは非常な賞行するところだといつた。

新マルサス主義の普及は當然、本生率の低下となり、現るべきであるが、西
欧特に英國独逸は一八七六年を界として本生率不明かに減退の過程に
入つてゐる。このことは新マルサス主義運動が當時既に民衆の生活の中は如何に
備蓄されることを示すものである。

（から）にこれにオト一つの著名な事件が起る。医師オルバント事件が
れである。

一八八七年エティハラ王立医科大学は同校卒業生を以てオルバントの
人妻便覧なる小冊子を出版し、愛胎調節の技術を解説し、そのも広告
の中に「マルサス主義用具なる文字を使用したことを理由に彼に對する。

八 巨科大學の免許と 公員資格を奪う決議をした。新マルサス主義同盟は彼の擁護のために大に努力した。遂に級へ處分は決定した。ポールバシト事件は結局新マルサス主義者の敗北に終わった。この事件により一般社會に於ては受胎調節と論下ることになり、日常茶飯事となり、受胎調節の實踐は民衆の間によりかりに根を下すことになった。

新マルサス主義運動は三世紀に入ると、その社會的經濟的諸情勢の促進する非常な進展を予した。特に第一次大戦以後に於ては受胎調節は一般的に非常な普及徹底を遂げた。その趨勢は先ず組織の發展という形で現れている。

英國 和蘭 独逸 佛蘭西に於ては既に十九世紀後半に於て同盟の結成と見ることが出来るが、三世紀に入つてからは、十世紀までの間に尋常の欧米諸國に於てその結成と見せている。また一九〇五年の第一回新マルサス主義國際會議以來、よく國際會議が開かれてゐるが、第一回パリ國際會議は新

マルサス主義聯盟國際聯合の設立の議決され、更に第三回ハルカ會議
には新マルサス主義國際連絡事務局の創設も決定された。以後は第一次大戦
による中断を経て、一九二三年にはハルカ會議の第五回、一九三五年には
ニューヨークで第六回ハルカ會議の開催された。

またこれらの組織活動と併行して幾つかの重要な会議の企画も、
一九二三年にはオランダの提唱による「世界人口會議」の開催、
この會議を母体として國際人口會議や國際受胎調節「醫學研究會」の
設立に

これより更に、オランダに於ては、一八八三年に、世界最初の受胎調節相談所
が開設された。新マルサス主義運動の進展と共に相談所の普及と見られ
るとは当然であった。一九三三年にはオランダの企画で、第一回國際受胎調節
相談機関會議が開催された。

16
新マルサス主義運動の民衆への浸透は、これと受胎調節の技術的側
面の発達に伴って進んだ。これは当然である。オランダの事件以来、沈黙状

の終りにある医学界の発展に及ぶや俄然意識ある運動を開始した。

この要約に於いて新マルサス主義運動者として最も大きな役割を演

じたものはサカトーであり、アメリカに於ける新マルサス主義運動はサカトーの本

我の予言を信じて依然低調であったが、彼女の出現による一大進展を見る

ことにナゲクた。

サカトーは一九一三年に新マルサス主義運動を開始し、「家族の制限

する著書と秘密裡の本報」更に定期刊行物「婦人の友誼」を出版し

いる。これ以後に月刊誌「受胎調節評論」を先行するものに基礎を確立

した。一九一五年に同盟の組織され、翌一六年には彼女によるアメリカ

最初の相談所「ファミリークラブ」設立されたが、間もなく肉親の連帯に迫られた。

一九一九年には「ファミリークラブ」同盟の組織されたが、この同盟の目的は第一

親とすることか白登の意思に基き、この制度の確立、第二はコストック法の

廃止であり、本誌は一九一三年に月刊誌「受胎調節」を創刊し

ている。一九二二年サカトーはアメリカの受胎調節同盟を結成し自ら總裁に就

任した。三聯盟は「受胎調節評論」を引継いで其の機関誌として一九三三年はアメリカ受胎調節聯盟はニューヨークに相談所を設けた。これはアメリカに於ける相談所発達の母体となった。一九三九年頃には相談所の数は三百以上に達したといふ盛況で、正にこの頃は相談所普及時代ともいへる時代であった。

一方英國に於てはマリールーストラス于一九二二年ロンドンにイギリス最初の受胎調節相談所を開設した。更に建設的受胎調節及人種向上協會を設立した。この協會は四五五年に至る。月刊機関誌「受胎調節」を創刊した。

アメリカ主義聯盟は一九三二年頃より活況な活動を開始し、盛んに宣傳活動を行つた。學生指導所を開設し労働者の受胎調節へ相談に及ぶようになった。この頃には聯盟の機関誌「アメリカ主義者」は新しき近代に改名されその編輯方針も一層時代の要求に添ふものになり改められた。またこの年、聯盟は改組され「新近代聯盟」と改称された。この聯盟は一九三五年に再び旧名に改められ、次は一九三七年には其の活

行動停止と決議

以下如く十九世紀後半から本世紀初葉にかけての間に停滞した新マカサ

主義運動の収米は第一の水準に於ける経済生活の窮乏と一九二九年に

世界に於ける恐慌の発生による停滞の受胎調節乃至胎産の減少は

戦後下於る欧米文明國に於ける根強の閉塞と亦その至る。一九二九年の

恐慌は第一の受胎調節の政策を以て臨國に現れた。一九二九年

の恐慌は第二の受胎調節の政策を示した。一九二九年の恐慌は第三の

受胎調節の政策を示した。一九二九年の恐慌は第四の受胎調節の政策を示した。

一九二九年の恐慌は第五の受胎調節の政策を示した。一九二九年の恐慌は第六の

受胎調節の政策を示した。一九二九年の恐慌は第七の受胎調節の政策を示した。

採州の如くは、余の如くは、知化渡の如くは、事案の如くは、

以下十九世紀後半から本世紀初葉にかけての間に停滞した新マカサ

主義運動の収米は第一の水準に於ける経済生活の窮乏と一九二九年に

世界に於ける恐慌の発生による停滞の受胎調節乃至胎産の減少は

戦後下於る欧米文明國に於ける根強の閉塞と亦その至る。一九二九年の

恐慌は第一の受胎調節の政策を以て臨國に現れた。一九二九年

既に述べた如く、元来新マルサス主義は社会の諸善悪持負

困の解決策として乙の働者受胎調節の如く有効な手段を主張す

たのみ、其理論的基礎としてマルサスの人口原理と賃銀賃金説を採用し

たのである。即ち初期の新マルサス主義者の問題として其のものは主として過

剰人口の處理という社会生活としての問題の解決に於たりである。勿論、今日

の問題に於いては、種々の邊土邊地の見地から、初期の新マルサス主義者

による問題に於いては、その見地から、また今日の新マルサス主義者の見解

から見れば、種々の個人的の観念から見れば、然し、この二つの意味

で今日の新マルサス主義の主張の根源は、其萌芽の形に於いては、既に古くから存在し

ていた見解の事である。即ち、この問題の中心は、社会の全体的な問題

の處理に置かれていたことも、然るに、余は、この問題に於いては、社会の全

体的な問題として、その手段たる受胎調節の理論と、其の理論の基礎たる

十九世紀の人口論とは、新マルサス主義の運動の中心たる理論的基礎

と、種々の見解から、その中心たる理論の基礎たる理論の基礎と、その

新マルサス主義は極く個人的なものである。過剰人口の解決と
いうことよりも、寧ろ個人生活の擁護向上の手段として、更だ調節の強調
にあるようにしたものである。それはまた人口の資質の向上の手段として、強
調される傾向を強めたのである。こうして変化をもたらした大きな原因とし
ては産業革命の完成と進展に伴った、社会的経済的状態の変化、歐
米文明國に於ける人口増加の減退趨勢といふ二つの事象を挙げるこ
とが最もよくあらう。

右の如く、三女記の新マルサス主義運動の十九世紀の意味に於ける
理論的基礎の離れ傾向にあることは疑いなく、その理論的
基礎の完全離れ別個の新理論の建設したとは云い得ない。
それは依然としてマルサス的人口観と勞賃資金説の考え方を文
配的であり、その最もよく常識化、通俗化の形で存在してい
るからである。新マルサス主義には体系的理論の欠けと云われるが、二十世紀
的な意味に於ける新マルサス主義理論の確立の今後に残るべき課題は

あるところには疑い得た事案あり

(島村 枝子)